



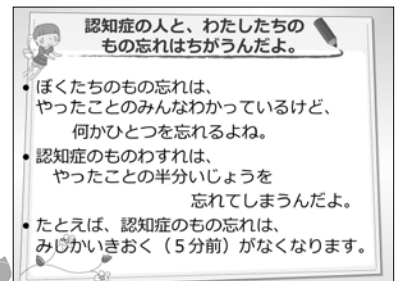
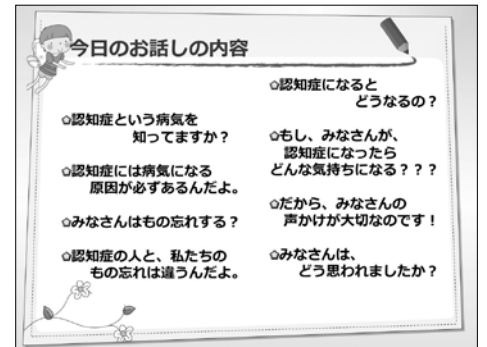
小学生ボランティア新聞 ふろく

認知症ってなあに？

*本紙の特集事例をよりくわしく解説！あわせてご活用ください。

先生方へ
やまびこだより
No.126
今号の特集から

見よう・知ろう・聞こう 認知症を知って、みんなで支え合おう



飯綱町社会福祉協議会の坂本圭介さんが講師となって開かれた飯綱町立三水第二小学校の4,5,6年生、牟礼西小学校3年生の福祉講座。「認知症ってなあに？」をテーマに、目に見えない脳の病気(障害)について学びました。

「目に見えない病気(障害)の認知症であっても、目に見えてわかる病気(障害)であっても、困っているように見えたら支えになってあげたいと思う」といった子どもたちの感想もありました。



認知症は、むずかしい？

認知症は、小学生には難しすぎるテーマでしょうか。長野県は長寿県です。長生きをしている高齢者が、地域にはたくさんおられます。おじいちゃん・おばあちゃん、ひいおじいちゃん・ひいおばあちゃんと同じくという家族も多いでしょうし、また近所には、ほぼ間違いなくご長寿の方がおられることでしょう。

認知症は誰でもなる可能性のある、いわばありふれた脳の病気です。80歳以上の高齢者の4人に1人に、認知症の症状があるとも言われています。小学生の日常生活の周りに、認知症に悩む方が生活しておられる、というのは、ごく普通のことかもしれません。

認知症の症状があり「自分とは違う」人を、どう理解し、受け止め、共に生きる仲間として認めていくか。病

気そのものの理解とともに、目の前にいる人をひとりの人として受け止める人間観を育むことが大切です。

特集「ぼくのおばあちゃんは認知症です」で、タクヤくんの大好きなおばあちゃんは、認知症になってもやはり大切な、かけがえのないおばあちゃんです。大好きだからこそ、認知症の症状を見るのはつらいこともありま。本人も家族も悩み、戸惑い、困っているのです。

本人と家族の方を、あたたかく受け入れていくことが、地域の人々に求められます。難しいことをするのはなく、小学生だからこそできることもたくさんあります。

この特集では「小学生ならではの」関わり方、地域に果たす役割も考えてみましょう。

さらにもう一歩

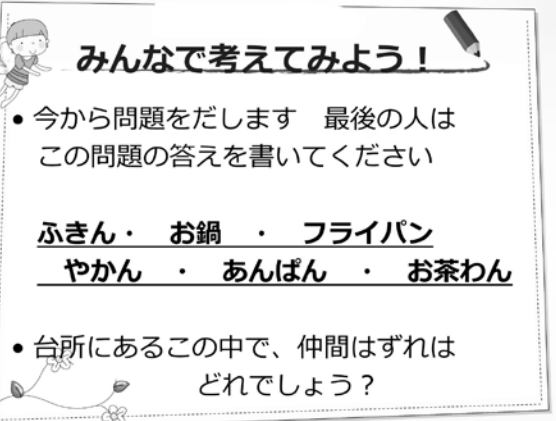
「認知症に悩む方を地域で支える」ことは、「違いを持つ人を排除しない」ということのほんの一端です。さまざまな障害のある人、外国出身の人、それだけでなく、私たちひとりひとりもそれぞれ違います。さまざまな「違いを持つ人」が、同じ地域に暮らしています。

三水第二小学校、牟礼西小学校での授業「認知症ってなあに？」のために、坂本さんはこんなクイズを考えました。みなさんはどう答えますか。

答えをグループで話し合うと、いろいろな理由で、いろいろな答えが出てきます。そのどれもが正解です。いろいろな人がいて、いいのです。

認知症についても、そうした「違い」の一つとして受け止めてください。

問題 仲間外れはどれでしょう。
また、なぜそう思いましたか？



●認知症を理解する講座についての詳細は、お近くの社会福祉協議会、地域包括支援センター、市町村の保健福祉担当部署へご相談ください。

[参考資料]
学習用テキスト「あるがままを 認知症を知ろう・知りたい・知るために」社会福祉法人飯綱町社会福祉協議会
認知症サポーター小学生養成講座副読本「認知症ってなあに？」厚生労働省老健局高齢者支援課 認知症・虐待防止対策推進室／全国キャラバン・メイト連絡協議会
協力：社会福祉法人飯綱町社会福祉協議会

発行日：平成25年1月20日 発行：社会福祉法人 長野県社会福祉協議会 総務企画部 地域福祉推進グループ

〒380-0928 長野市若里7-1-7 TEL.026-226-1882 FAX.026-228-0130
E-mail vceneter@nsyakyo.or.jp URL http://www.nsyakyo.or.jp/

ねらい



坂本圭介さん

認知症に悩む方のためにできることは？

飯網町社会福祉協議会 認知症支援室の
坂本圭介さんにお聞きしました。



Q. 認知症を学ぶのは、小学生には早いでしょうか？

認知症を学ぶのは、小学生には早いと言われることもあります。長野県内には、多世代同居の家族も多いですから、自分のおじいちゃん・おばあちゃんが認知症になるかもしれない。その時に、家族の中で子どもたちだけを置いて行っていいのでしょうか。

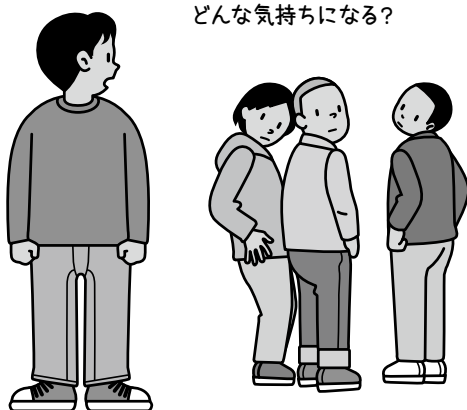
認知症というと、高齢者の病気だと思いがちですが、そうではありません。働き盛りの、いわゆる「若天性認知症」に悩む人が、日本に3万人以上いると言われています。小学生の親の世代でも、認知症という病気に悩んでいる人はいるのです。認知症はありふれた病気、周囲の理解が必要だということは、子どものうちから知っておかなくてはいけないと思っています。

「認知症ってなあに？」ということを知るために、まず「忘れるってなあに？」ということを考えてみましょう。誰だって忘れることがあります。宿題、忘れ物、約束……忘れたら「ああっ！」と思いますね。その「ああっ！」が、朝から晩まで続いている苦しさをわかってほしい。

それから「仲間外れってどんな気持ち？」ということ。仲間外れになったら悲しいし、さみしい。認知症に悩む方が、病気のために仲間外れになったような気がしたら、きつと悲しい。

認知症の方が悩んでいるのは、そういうところなんです。そんな「気持ち」から認知症を考えて行ってほしいと思います。

仲間外れにされたら、
どんな気持ちになる？



Q. 飯網町では、どんなふうに子どもたちと学んでいますか？

子どもたちに伝える前に、まずは先生方、保護者の方々に話をします。先生たちに理解していただくと、子どもたちが捉え方を間違えてしまった時に、修正していただけます。また、保護者の方の中には、実際に介護をされている方もいます。子どもが先に学んできて、介護しているおうちの方に「だめだよお母さん、おじいちゃんにそんなに強く言っちゃ！」なんて言う。実際に介護されているご家族の介護者としての悩みも尊重しなくてはなりませんので、子どもたちがどういう学びをしていくのか事前に知っておくことが必要だと考えています。ですから、まず大人から理解をしていただくようにしています。

子どもたちに、ただ認知症という病気を伝えるだけということとはしません。子どもたちは認知症に悩む方に出会った時に、別の世界の人のように見えています。まずその感じ方を知ることから始めます。「仲間外れはさみしい」、「困っている人をどう助けるか」、「違いはあるけど、本当はみんな同じ」、そして、認知症は目に見えない障害ですから「目に見えることがすべてじゃない」ということ。絵本や紙芝居、ゲーム、映像などを使って考えます。その上で、認知症という病気について学びます。

Q. 小学生の子どもたちが認知症に悩む方のためにできることは？

子どもたちが、認知症に悩む方に対して、純粋な気持ちで「困っているんだから何とかしてあげたい」と思ってくれば、おじいちゃん、おばあちゃんたちは、すぐに心を開いてくれます。子どもたちの力ははかり知れません。

「どう対応するか」という約束ごとを私たちが植えつけると、子どもたちはそれに縛られてしまう。私は、認知症に悩む方も、自分たちのおじいちゃんやおばあちゃんと一緒だよ、とお伝えします。構えないで、のびのびと接してほしいと思います。高齢になれば、足も弱るし言葉も聞き取りにくいし、のろのろしてしまうし、中には認知症の方もいる。誰でもそれぞれ悩みを抱えて、困っている。そうしたら手を貸してほしい。そういう気持ちが育っていけばと思っています。

「なんとかして
あげたい……」
そんな子どもたちの
純粋な気持ちが大切。

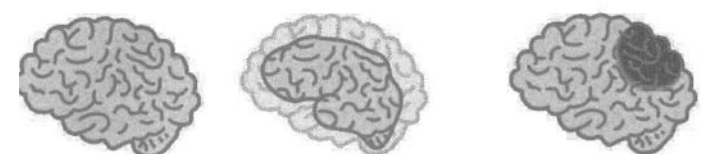


おじいちゃん、おばあちゃんは悩んでいる

認知症を知ろう

認知症は、脳の病気や外傷、血管性の病気などの理由により、脳細胞が死んでしまったり、働きが悪くなったりするために様々な障害が起こり、それが継続している状態です。

覚えられない、忘れてしまう、ここはどこで、いまがいつで、目の前にいる身近な人が誰か、というようなことがわからなくなったり、判断力が衰えたり、計画を立てることができなくなったりします。こうした症状のために、それまでのような生活ができなくなってしまいます。



健康な脳

アルツハイマー病の脳

脳の細胞が死んで
脳全体が縮んでしまう

脳血管性認知症の脳

血管がつまって
一部の細胞が死んでしまう

認知症の症状は、「中核症状」（病気によって直接起こる症状）と「行動・心理症状」（環境や心の状態によって起きる症状）に分けられます。

中核症状

- 覚えられない、忘れてしまう
- 自分の周りのことがわからない
- 時間や月日がわからなくなる
「今日は何日？」と何度も聞く
- 場所がわからなくなる
「自分が行きたい場所がわからない」
「トイレはどこ」
- 人がわからなくなる
「どなたですか」

治すことは
できません

*こんなときは……声のかけ方を変えてあげましょう
怒ったり、叱ったりせず、不安にさせないようにゆっくりとおだやかな口調で話しかけます。



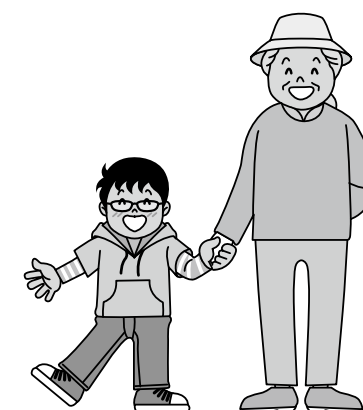
行動・心理症状

- 元気がなくなる
「自分に何かおかしいことが起きている」
- ものを盗られたと思い込む
「しまった場所を思い出せない」
⇒「きっと盗まれたんだ」
- 道に迷って帰れない

いちばん不安なのは
本人です

不安だから症状が
行動に現れる

環境や周りの人の
接し方で症状が
変わります



その人の本質は
変わらない

認知症を小学校で学ぶ …こんな取り組みもあります



長野市立寺尾小学校で行われた「認知症サポーター養成講座」の授業の様子です。松代地区民生・児童委員の皆さんによるグループ「オレンジキャラバン」が講師です。寸劇やパネル、紙芝居を交えたり、一緒に「こんな時どうする？」を考えたりと、子どもたちも実感を持って考えられるように、様々な楽しい工夫がされています。

「子どもたちは、これから地域の人を支えてくれる存在です。認知症を学んだ子どもたちが地域ににいるということは、認知症に悩む方、介護に悩む方にはとても心強いことなんです。」（オレンジキャラバンの皆さん）